

## ローエングリーン（中世ドイツ叙事詩）(10)

小 栗 友 一

以下は、中高ドイツ語による『ローエングリーン』の翻訳の続きである。今回は第391詩節から第440詩節までを掲載する。底本は Thomas Cramer : *Lohengrin. Edition und Untersuchungen*. München : Wilhelm Fink 1971。これまでの分も本誌に掲載されている。掲載の巻号数は以下のとおり。

- (1)第 1詩節...第 30詩節：第15巻第 1号 (2)第 31詩節...第 60詩節：第15巻第 2号  
(3)第 61詩節...第100詩節：第16巻第 1号 (4)第101詩節...第150詩節：第16巻第 2号  
(5)第151詩節...第200詩節：第17巻第 1号 (6)第201詩節...第252詩節：第17巻第 2号  
(7)第253詩節...第291詩節：第18巻第 1号 (8)第292詩節...第340詩節：第19巻第 1号  
(9)第341詩節...第390詩節：第19巻第 2号

### (391) 誇り高いブルゴーニュ公は

皇帝の次にはヴァーレイス人（ローエングリーン）を恭しく迎えた。

「本当によろこそおいでくださいました。

全くもって真実のところ

3905 お目にかかって心底から喜んでおります。

長い間あなたほど会いたいと思った人はありません。

私がどれほどあなたに敬意を捧げたいか、

そのことを心に銘記していただきたい。」

すると、誇り高い騎士の面々が

3910 彼を見ようとして周りに殺到した。

### (392) 騎士たちの押し合いへし合いが長時間続いた後、

皇帝は侯に会議への出席を求めた。

というのは自分の名誉のために侯が必要だったからである。

マインツの司教ヴィリキーンと

3915 アンショウヴェ人（ローエングリーン）がルルフ王のもとに派遣され、

アフリカ勢がローマを眼下に

カづくで圧制の城を築いた山々（アルプス）を越えて

皇帝の許に参ずるように、

そうすれば、かの地で永遠の至福を見る報酬が  
3920 授けられるであろう、

- (393) 皇帝としても一生涯、王に対して  
援助と助言を惜しまないから  
遠征を心から進んで遂行するように、と伝えさせた。  
王は答えた、「皇帝は前にこの件で  
3925 我が国に書簡を寄越されたが、  
私は利益と損失を量り、  
熟慮の結果、心に決したのだ、  
この遠征に後れをとってはなるまい、  
魂が苦悩を嘗めねばならぬときに、  
3930 至高の方が平安を恵んでくださると信じる以上。

- (394) ところで、帝国の有様（ありよう）というものはこういうものだ。  
帝国の正義のために協力をし、どんな脅しにも  
屈しない者に対して帝国は法によって援助の義務を負っている。  
皇帝を信頼申しておる。  
3935 この遠征の目的を果たし、  
神のご加護を得て彼らを屈服させた暁には、  
皇帝にどんなお願いをしても、法に則って私を助けてくださるだろう。  
この遠征を躊躇うことなどすまい。  
全軍勢を率いていき、山の辺の御前に馳せ参じよう。  
3940 さもなくば、私は名誉を失墜するだろう。」

- (395) 公たちは言った、「立派なお言葉です。  
このご返事に皇帝はもちろん帝国に忠誠を尽くす  
全ての人々が感謝するでしょう。  
皇帝に王様のお言葉を伝えましょう。  
3945 それともご自分で皇帝の許にお出ましになられましょうか。  
とにかく、重臣の方々は十分お聞き取りになられましょう、  
王様が威厳に満ちた返答を託されたことを。  
聞く人の誇りとなるご返事でした。  
ご名声はいよいよ高まり、

- 3950 後の世にても誉めそやされるでしょう。」
- (396) 王は使者たちに言った、「私の返答を良しとされるのですから、  
一緒に私も御前に参りましょう。  
御前ではしかしどなたかに口上を述べていただきましょう。」  
公たちは答えた、「それでは一緒に参りましょう。」
- 3955 ご返答は至急伝えるように致し、  
細心の注意を払って申し述べ、  
皇帝と全ての貴顕の耳を通して  
心の奥底にまで到着するように致しましょう、  
神のご加護があれば皇帝は必ずや
- 3960 勝利を獲得しましょうと。」そこにロートリンゲン公がやってきた。
- (397) ブルゴーニュ公は客人のために宿の手配を命じた。  
マインツ司教とブラバント公（ローエングリーン）は  
ルルフ王の返答を伝えた。  
全ての貴顕が聞き、
- 3965 皆の耳に鳴り響いたことは、  
王がどれほど誠心誠意  
帝国と皇帝のために援助の意志があるかということだった。  
皇帝はこれに感謝して言った、「私の命のある限り、  
ブルゴーニュ王殿、私の信義にかけて請け合います、
- 3970 私の誠は一度たりともあなたから離れることはないでしょう。」
- (398) 軍勢が出発した。  
あらゆる方向から隊が加わり、  
ここかしこ、あらゆる所に軍旗が煌めいていた。  
兜と楯も光っていたが、
- 3975 そこには名工の手の技による丹精と  
工夫と熟練が籠められていた。  
軍は山々を越えてロンバルディアに向かった。  
皇帝は主馬頭に休息のための营地を定めるように命じた。
- 3980 軍勢はそこに落ち着き、皇帝の到着を待った。

- (399) 皇帝と、皇帝が遠征の同行者として選んだ  
諸侯が皆到着し、  
その日はずっと休憩した。  
一行は軍勢を従えてミラノに向けて進んでいった。
- 3985 槍の柄の端には友好の印として  
黄色の布がしっかりと結びつけられていた。  
一行が町に迫ってくると、市民は  
参事会の中から最高の者を 4 人送った。  
使者は、皇帝に速やかに伝えた、
- 3990 皇帝のご威光はお噂でよく存じておりますと。
- (400) 一同は言った、「陛下、お噂に聞いております、  
国中が期待を寄せている  
ブラバント公を伴われておられると。」  
皇帝は答えた、「確かに公を伴ってきた。
- 3995 故国に残しておきたかったのだが、  
遠征参加の意志を曲げようとされなかったのだ。  
国の防衛のためには故国にいてもらいたかったが。」  
一同は言った、「公がここに来られたのはよいことです。  
陛下はこの遠征に成功されて、
- 4000 いかなる時代の皇帝も及ばない名声を享受されましょう。
- (401) 陛下、市の意向によって私たちは参りましたが、  
次のことをお伝えいたします。  
陛下の輜重を糧食で満たしますとともに、  
陛下とお供の全ての方々に
- 4005 この地でしばらく休養されますようにと願い、  
幸運の女神のお守りを祈っております。」  
皇帝は言った、「余はこの地でアルル王の到着をしばらく待たねばならぬ。」  
一同は言った、「誠に結構でございます。  
陛下と諸侯それにこれから来られる方々全てに
- 4010 ご滞在中食料を提供いたしましょう。」
- (402) それから三日目の朝早く

アルル王が堂々と到着し、  
皇帝の主馬頭の指示に従って  
そこを流れる川の辺りに陣を構えた。

- 4015 川は陣地を垣のように囲んでいた。  
主馬頭は緑地に下馬するように指図した。  
アルル王は皇帝に、自分の出発前に  
フランス王から使者が派遣されてきたが、  
フランス王は、神の思し召しにかなうならば、四日の行程で  
4020 ローマの手前の地点で皇帝の許に合流する意向です、と伝えた。

- (403) ミラノ市は皇帝とブラバント公には特別に、  
また諸侯それぞれの権勢に応じて  
豪華な贈り物をした。  
市が諸侯それぞれの地位を正しく判断したので

- 4025 不満を漏らす者はなかった。  
多くのドイツ人は、市がどこからこの豊かな贈り物を  
調達したのか不思議に思った。  
市の面々にも遠征参加の命令が下されたが、  
国に留まりたいがために、  
4030 莫大な贈り物をしたのである。

- (404) 皇帝は言った、「諸君はここに留まっていただきたい。  
これは余と、ここにいる全ての諸侯の  
意向である。」「そうでしたら、  
二百人の騎兵をお供にさせましょう。

- 4035 歩兵はこの地に留め、ご指示を待ちましょう。」  
皇帝は言った、「この戦闘のために  
二百頭の軍馬をそっくり送ってくれるならば、  
貴市の名誉は高まりましょう。  
諸都市の中にあって、その声望が遠方に鳴り響くことで、  
4040 貴市に匹敵する市はまずあるまい。」

- (405) こうして一行は、強い敵愾心を抱いている  
敵を目指して更に先へと進んで行った。

そこへフランス王が予告どおりに  
威風堂々とやって来た。

4045 緑の草の上には豪華な天幕が張られた。

このように華々しく戦闘に赴こうとする人々は、  
恥辱とも貧困とも無縁だった。

そこここで楽しく娯楽に興じられ、  
夜になって休息をとらねばならなくなるまで

4050 お祭り気分で賑やかだった。

(406) 翌朝太陽が輝き出すと、

皇帝は諸侯と諮って  
この日一日の休養を触れ回らせた。

伝令官はそのことをそここ

4055 到るところで触れ回った。これに対して反論がなされても、  
伝令を止めることをしなかった。

フランス王には威厳が備わっていた。

その王と皇帝それに高貴の血筋の諸侯が  
ブラバント公の近くに見られた。

4060 見よ、一人の使者が彼らの前に急いで駆けつけてきた。

(407) 一同が席に着くことになり、

皇帝とブラバント公は彼らの周りを回って行き、  
諸侯が着席するのを待とうとした。

それぞれの王は別々に座り、

4065 権勢を誇る諸侯もそれに倣った。

そこではきつい香辛料の匂いがした、と言われている。

皇帝に対するメッセージは書簡によって伝えられたが、  
使者は口上によっても伝えた。

趣旨が完全に伝わるためであった。

4070 皇帝が直ちに駆けつけなければ、信仰が恥辱を被るとのことであった。

(408) 使者は続けた、ギリシア(ビザンチン)の皇帝はやってきました、

アフリカ勢はこれを聞きつけ、

急いで陣を敷きました、

アフリカ勢の勢力があまりに強大でしたから、  
4075 教皇も富強の皇帝もローマに逃げ込みました、  
「仕返しをしなければ、  
キリスト教界は権威を失墜するでしょう。  
ギリシア勢は糧食のために当地を去りました。  
すべてが焼き尽くされまして、  
4080 陛下の到来が少しの希望を約束してくれるだけです。」

(409) 使者が皇帝に内々に言上すると、  
皇帝は言った、「遺憾なことである。  
余とここに参集した  
王侯の到来を待っていたらよかったのだ。  
4085 愚かな子どものようにあせったな。  
威光を広め、  
我々に先んじて名誉をわが物にしようとして  
かえって恥辱を被ってしまった。  
気の毒としか言いようがない。しかし一方で  
4090 戦うことなく、敵を我々共通の憎しみの的とさせたことは喜ばしい。」

(410) 使者は答えた、「陛下、ブラバント公にも  
書簡を渡すように託されています。  
手渡さねばなりません。同時に  
口上も述べねばなりません。」  
4095 皇帝は使者に非の打ち所のない方（ブラバント公）を紹介した。  
使者はヴァーレイス人（ブラバント公）に手短かに要件を伝えた。  
皇帝とブラバント公は一緒に着席した。  
しかしその前に、フランス王に対して  
ギリシアの皇帝と教皇が  
4100 アフリカ勢の前からやむをえず退却した状況が報告された。

(411) このことは他の諸侯の前では話されなかったが、  
食事の後ではきちんと伝えられた。  
諸侯は言った、「彼らは我々に先んじて  
威光を輝かせようとして

4105 かえって名誉を失ってしまい、  
町に、われがちに逃げ帰ったということですか。  
我々は自分たちの名誉のためにも彼らの救援に赴こうではないか。」  
あそこでもここでも一斉に賛成の声が挙がった。  
諸侯の意見を取り入れて返書が作成され、  
4110 遅滞なく送られた。

(412) 教皇に対しては、このように伝えられた、すなわち、  
皇帝軍の到着を待っていても恥辱にはならなかったでしょう。  
皇帝軍は自慢の騎士団を擁しているのですから、  
援軍を待つのが正当だったのです。  
4115 不信仰（の輩）が皇帝軍にたいして勝利を勝ち得、  
力づくで圧倒するとしたら、  
キリスト教界全体が権威を失墜しましょう。  
皇帝軍は勇気凛々としています。  
自慢の優れた騎士をもって敵に襲いかかり、  
4120 戦場をバラの色に染めましょうと。

(413) 軍はこの日も動かずに陣営に留まり、  
事を熟知した人々と相談った、  
戦闘に突入したならば、どのように進めるべきか、  
アフリカ勢が名誉を求めて  
4125 立ち向かったときには  
いくつの隊に分けるべきかと。  
軍は5個の隊に編成されることになった。  
先鋒は法の定めるところによりシュヴァーベン公であった。  
それは王にも諸侯にも正当で当然のことと思われたが、  
4130 古来からの慣例であったのだ。<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> Cramer S.153 によると、『シュヴァーベンシュピーゲル』*Schwabenspiegel* §31の次の記述に基づいている。「シュヴァーベン人の遺産について ... この権利はカール Karl 王がシュヴァーベン人に与えたものである。それは、ローマ近傍でローマ人たちが教皇を盲目にしたときに起こった。教皇はレーオー Lêô と称し、カール王の兄弟であった。その後カール王はローマを包囲した。シュヴァーベン公ゲーロルド Gêrold はシュヴァーベン

人を率いて最初にローマに入り、シュヴァーベン人の助けによってローマを完全に押さえた。カール王は、帝国のために戦闘を行うときには、シュヴァーベン人が全ての部族に先んじて戦う(特権)を授けた。」この規定はさらに『諸王の書物』*Buch der Könige*の次の話に依っている。「(カール皇帝について) ... 皇帝は軍勢にその朝出発し、ローマに向かうように命じた。シュヴァーベン公がこの都市に最初に到着した。ローマの人々は都市の門を開いてシュヴァーベン勢と戦った。シュヴァーベン勢はローマ側に勝利した。」

(414) しかし、公の軍勢は一つの隊とするには小さすぎた。

そこでバイエルン勢とフランケン勢が加えられ、

恐るべき、誇るべき隊となった。

フランケンの(ライン川の)ピンゲンより上流の地域の者たちを、

4135 武勇と知恵を兼ね備えた方

シュヴァーベン公エベルハルト(Eberhart)は選び取った。

一方、バイエルン公アルノルト(Arnolt)は故国に留まらねばならなかった。

そしてバイエルンの全ての司教区は公とともに

フンの者たちが暴虐を振るわぬように

4140 辺境を防備しなければならなかった。

(415) それでも多くのバイエルン人が

愛と高邁な気概に満ち雄々しくも馳せ参じていて

軍隊の中で目立っていた。

ルルフ王は第2隊を率いたが、

4145 それにはエルザス勢の全てと

ヴォージュ(Wasiten)の地の勇猛な戦士が配された。

シュパイアーの地は多くの騎士を擁するが、その者たちも配属されて

アルルの若き王、勇気溢れるゲールフリト(Gêrvrit)は

4150 第3隊の指揮者に定められた。

(416) ロートリンゲン公ギーゼルブレヒトも同じ指名を受けた。

この二人は実に最高の人たちに属するのである。

ザールブリュッケン公とメッツの司教も

第3隊に配属された。

4155 4者は確かに、敵に対して勇猛心の奮い立つ

騎士と従士を欠いてはいなかった。

第 4 隊はフランス王が率いることになった。

王は臣民を重んじ、

強力な一隊を擁していたが、

4160 それは王の版図が広大だったからである。

(417) 第 5 隊は皇帝が導くことになった。

どれほどの伯、騎士、従士それに諸侯が

皇帝の麾下にいたことか。その一部をここで挙げよう。

彼らは勇猛心溢れる人士で、

4165 ベルンのディエトリーヒ殿が立ち向かって、

たたき切られるだろうと誰もが思った。

皇帝の隊の増強に貢献したのは、皇帝自身の子息の司教ブルー、

それにブラバント公、

マイセン侯でテューリンゲン方伯の

4170 フリデリーヒ (Friderich) 辺境伯ら名誉を重んじる面々であった。

(418) 方伯のザクセンの臣民と

(ライン川の) ビンゲンより下流に居を構える人々、

彼らが侯、伯、自由騎士、家人、従士など、

どのように呼称されているにせよ、

4175 全てが第 5 隊に組み入れられた。

この隊の勢力は強大であった。

ミラノの人々は主馬頭とともに宿営の確保を求められた。

そこの地理に明るかったからである。

浅瀬、山、谷底を駆けめぐる心得があったので、

4180 少数で先発するように命じられた。

(419) 私は多くの諸侯の名前を挙げないが、

それを言い立てると退屈してしまう方々もおられるので

言わぬままにしておくのである。

そういう話はこれくらいにしてみなさまにお伝えしたいのは、

4185 教皇のもとに短時間で知らせが届いた次第と

アレマン人がやってくると正式に聞いて

その話に入々が喜んだ次第である。  
 穴蔵、部屋、家あるいは倉に  
 隠しておいた食料は  
 4190 すべて取り出された。

(420) アフリカ勢には報告が伝わった、  
 臆することを知らぬローマ皇帝が  
 多くの誇り高いアレマン人を従えてやってくると。  
 彼らは尋ねた、「その名声が諸国に広く鳴り響いている  
 4195 あのブラバント公もやってくるのか。  
 公のような勇士が3人でも揃えば、  
 栄誉は思うままなどと言われていようが、そんなことはさせまいぞ。  
 我らの力で損害を与えてやろう。  
 これまでに積み上げた数々の名誉と名声を、  
 4200 死の利子を付けてこちらに渡していただこう。

(421) 皇帝が近づいてきたら、  
 自分の命を抵当として置いていくつもりがなければ、  
 すぐにもこの地から追い払ってしまおう。  
 キリスト教徒一人に対して  
 4205 味方は40人を越すのだから、  
 ひとりとして無事に故国に返すことはしまい。」  
 彼らは敵が近づいたのを好ましいと言ったが、  
 相応の軍勢を擁していたからである。  
 「我々に刃向かう者は、ひとりとして  
 4210 生け捕りにする必要はない。残らず打ち殺してしまおう。」

(422) 彼らの言葉は傲慢であった。  
 自分たちの力はどこでも通用すると思ったからだ。  
 かつて教皇が退却し、  
 ギリシアの君主も同じであったので、  
 4215 どんな勢力によっても恥辱を被ることはない、  
 と考えたのである。彼らはこっそりと到来し、  
 公然と陣を敷いた。

ローマの人々はこれに気づくと、  
すぐに公然と戦場に向かった。

4220 大地が震動した。

(423) アフリカ勢も、物語の伝えるように、

時を移さずやってきて、  
敵に向かって堂々と戦場に陣を構えた。

アフリカのゲールフリドルト王は

4225 すべての部下に莫大な報酬を差し出したり与えたりして、

戦場での相応の勇ましい働きを期待した。

サルタンには娘があり、名前はヴァリダハ (Waridach) と言った。

娘婿が総督 (atmerât)

弟がカリフ (bâroch) で、広範な国々から

4230 罪の救いのために (?vür sünd mit rât) 軍勢を引き連れてきた。

(424) 彼らは戦闘を控えようとはしなかった。

10個の隊を編成したが、

それぞれの大部分がキリスト教徒勢全体に等しかった。

彼らはみな、カリフが

4235 罪の償いのための遠征と称して集めたのである。

しかし、彼らの神々、テルヴィガント (Tervigant) もアポロも

ジュピターも、またカーフネ (Kâhûne) も彼らを救うことはできない。

キリスト教徒勢に剣を振りかざして襲いかかろうとも、

敗北を被らざるをえないのである。

4240 彼らは自分たちの探していたものをすぐに見つけた。

(425) ツェントルン (Centrun) の王に先鋒が任された。

王の武勇がそれを強く求めたのである。

多くの富強の王がその麾下に配された。

彼らに向かって、前にお聞きになったように、

4245 シュヴァーベン勢が突っ込んだ。

兜や旗が、また手に携えた

抜き身の剣が敵意を漲らせて煌めいた。

少人数の人々 (?das ringe volk) が両者の間に挟まっていて、

両軍が押したり引いたりしたが、  
4250 ついには両軍がぶつかり合った。

(426) 異教徒勢の軍衣は高価な代物で、  
絹地が炎のように煌めいていたが、  
その多くが緋色に変えられた。  
命に関わる深手を受けて  
4255 光沢のある絹地に血が流れた。  
軍衣は地面に落ちて軍馬の敷き藁になった。  
文字通りの苦しい真剣勝負が行われ、  
多くの者が軍馬から落馬し、  
熱い血が深い傷口から噴き出し、  
4260 命の終わりが溜息をつき、むせび泣いた。

(427) 今度はアマティスト (Amatist) の王が第 2 隊を率いて  
やってきた。王は、誰も自分の激しい突撃に遭っては、  
キリスト教徒勢を守ることができないと思った。  
王とともに、王の隊に配属された  
4265 多くの高貴な王もやってきたが、  
雄々しい勇気と高邁な心を抱く王者であり、  
聴衆の方々が退屈されなければ名を挙げるところだ、  
なにしろ、王たちはそれぞれ生国であり、自己の名称となっている  
国を領有しているし、  
4270 私はその国名についていろいろ解き明かすことができるのだから。

(428) というのも、私は聖書に通じているからである。  
聖書はすべての国々を一つ一つ挙げているのだから、  
聖書に通じている人は聖書通りに名を挙げるとよいのだ。  
これはこれくらいにして話を端折ることにしよう。  
4275 オラゲンテジーン (Oragentesin) の王が多くの国々からの  
第 3 隊を率いてきた次第を伝えよう。  
この日王の軍旗には王侯が従ったのである。  
この王に向かっていったのは、ブルゴーニュの王と  
その隊に配属されていた者たちで、

- 4280 両者とも相手を容赦しなかったと思う。
- (429) 騎馬での槍の突き合いが絡まり、  
双方とも勇ましく全力で押し合い、  
衝突して、多くの軍馬が嘶いた。  
双方の敵愾心が人馬両方を苦しめた。
- 4285 先陣が力強く進むと、  
緑のクローバーが踏みにじられ、  
誰もが生来の雄々しさを発揮して  
名誉にかけても味方を守ろうとした。  
アマティストの王が見事に戦い、
- 4290 多くのキリスト教徒は損害を増やした。
- (430) 戦闘は双方にとって厳しいものになった。  
死は多くの者を旅の道連れに連れて行き、  
彼らには日の光がもはや当たることはなかった。  
たとえ傷を負わずとも
- 4295 落馬してしまったら、話は別であった。  
地面を血で湿らせなかったとしても、  
馬に踏みつけられ、命を抵当に取られた。  
しかし、誰もそれに怯むことなく、  
名誉を挙げるべき場所に向かった。
- 4300 今度は第 4 隊が送られた。
- (431) 第 4 隊はペルシアの王が率いたが、  
その跡を多くの高貴な王がつけて行った。  
ペルシア王は諸王を混戦の只中へと導いた。  
そのために多くのキリスト教徒が傷を負わされ、
- 4305 敵味方双方が入り乱れるに及んで、  
多くの誇り高い心も不安と恐怖に包まれた。  
異教徒勢はキリスト教徒勢を屈服させたと思った。  
彼らはこうして圧倒する勢力でキリスト教徒勢を包囲し、  
蹂躪して大損害を与えたが、
- 4310 こちらも反抗して多くの敵を亡き者にした。

- (432) そこへアルル王が救援に駆けつけた。  
王は、洗礼を受けた人々（キリスト教徒勢）が、  
優勢の異教徒勢から、さもなくば受けたであろう  
大損害を未然に防いだ。
- 4315 王は、サラセン人を蹂躪し、  
多くの者が生きる気を無くした。  
今やキリスト教徒勢は一様に力というものを感じた。  
それゆえ多くのサラセン人は自分の命に  
短期終了を宣言しなければならなかった。
- 4320 深い傷を負って地に倒れたからである。
- (433) アルル王がペルシア王方に反撃を加え、  
キリスト教徒勢が力を得た。  
異教徒勢は槍を突かれて馬上から落馬し、  
死でもって償いをした。
- 4325 キリスト教徒勢は、ペルシア方に  
分断されていたが、今や再結集した。  
異教徒の全軍が退却を開始し、  
敗走せんばかりになった。  
そこで、第5隊に対し、遅滞なく急ぎ救援に駆けつけるようにと
- 4330 急遽伝令が発せられた。
- (434) 第5隊はラトリゼト（Latriset）の王カローン（Chalôn）が率いていたが、  
王は他に三つの国を領有し、  
更に5個の王国が王の手に税を納め、  
6人の王が彼から王冠を授かっていた。
- 4335 それでもアッシム（Assim）の富強の王が配下に付けられた。  
また、多くの王と諸侯が加わり、  
この隊は最強の勢力と言えた。  
今やカローン王が大勢力をもって戦闘に突入し、  
多くのキリスト教徒がこの軍隊のために
- 4340 致命的な傷を負った。

- (435) キリスト教徒勢は一塊りになり  
雄々しく戦っていたが、  
大勢力を率いた王が戦闘に加わり、  
激しい突撃のためにバラバラになった。  
4345 そのために、キリスト教徒、異教徒双方で  
多くの者が戦友を奪われた。  
子は父を、兄は弟を失った。  
槍を構えての突撃が一斉に行われて  
死が多くの命の重荷となり、  
4350 多くの体が死の型に合わせて切られた。
- (436) 各隊それぞれの関の音が  
力強く響きわたり、空が  
張り裂けるかと思われた。  
さらにラッパとタンバリンが鳴りどよめき、  
4355 馬が嘶き、戦場遠く離れた所でも  
この騒音から逃れようもなかった。  
多種多様の人馬の喧噪が響き、  
喚声に翼こそなかったものの、  
高所が低所に、遠方が近辺になった。  
4360 厳しいと言われる開墾作業もこの戦闘ほどではなく、
- (437) むしろ気楽な生活と言えたであろう。  
各人がどのように懸命に相手に対峙したか、  
それを一々皆様に語って知らせることはできない。  
イエリコ (Jericho) の王がやって来たが、  
4365 その男らしい勇猛心は、常に高い榮譽を目指していた。  
船が海の浪を掻き分けていくように  
王は軍勢もろとも戦闘に突入した。  
イエリコの王は諸王を引き具してきたが、  
彼らは臣従して王の命に服していた。  
4370 さらに騎馬隊を擁する 3 人の王が一緒だったが、
- (438) アフリカのゲ - ルフリドルトが

第6隊の編成の際にイエリコの王に付けたのである。

彼は諸王にイエリコの王の軍旗の許に動くように命じていた。

スカンダナーヴィーアー (Scandanâviâ) の王も

4375 雄々しく彼の跡に続いた一人だが、

兜から火の粉と破片を飛ばした。

2番目はイングレ (Yngule) の王、3番目はガマス (Gamas) の王で、

彼らが一緒に戦闘に突入した。

彼らは強大な勢力と広大な領国の力を示して

4380 突撃し、戦闘の中心部を打ち破った。

(439) イェリコのゲスパリス (Gesparis) が率いる

第6隊が激しく割り込んできて

キリスト教徒勢は分断された。

異教徒勢が数を増し、

4385 キリスト教徒勢の数が減った。

多くのサラセン人は

勝利を戦い取ったと確信し、気が立った。

洗礼を受けた人々は損害を被った。

しかし、キリスト教徒勢の方が異教徒勢の血の中に剣を浸すことができ、

4390 雄々しさでは、十分敵に対抗した。

(440) それでもキリスト教徒方の勢力は敵に対して小さすぎた。

勇猛さは戦闘の中で果敢に発揮されたが、

敵の多勢に対しては効き目がなかった。

教皇ヨーハンとロンバルディア王の擁する軍は、

4395 すべて残らず皇帝が

一つの隊に編成していた。この隊が

悠長に構えずドイツ勢救援のために戦闘に突入した。

フランス王はこの第4隊に選ばれなかったが、

それに腹を立てて、

4400 突撃して手柄を得たかった、と言った。